昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十九年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第三〇〇号）

慈光

第二十六巻　第五号

目次

如来の本願……近角常観……(1)
人生随想……柳瀬留治……(9)
信仰の両面と労働問題……佐藤強三郎……(13)
念仏詩抄……木村無相……(16)
信味その折り〳〵……花田正夫……(19)

如来の本願

近角常観

真宗は仏教の精髄である。もう一つ云うならば仏の真実そのものである。その仏の真実とは、聖人の言辞で云えば回向である。『教行信証』教巻の首（はじめ）に曰く

謹で浄土真宗を案ずるに二種の回向あり、一には往相、二には還相なり。

聖人の一代は、聖人の信仰の示現であって、その思想、言動ことごとくこの二字におさまり尽して余蘊なしと云うべきである。味わえば味わうほど味の深いのはこの回向の二字で、私はこの回向の文字について深く感じて居る。然る所以は、現時信仰の問題は皆この回向の文字に帰するからである。この二字はまことに肝腎の文字である。

常に云うように信仰問題は必ず人生問題から来るものである。釈尊は老病死を見て信仰問題に着目したまい、親鸞聖人も九歳の春、深き無常の感に打たれて出家し、十九歳の時に磯長の聖徳太子の廟窟（びょうくつ）に参籠して「汝の命根まさに十余歳」の霊告によって、いよいよ無常の感を切にし、信仰を求めること益々急になり給うた。法然上人は仇敵のために父親を討たれたのが発心、求道の動機となった。各宗派いずれの祖師の求道も必ず人生問題を動機としていることは云うに及ばぬことである。

このように人生が苦であるとか、人が互に怨み合うのが苦であるとかいう種々の事柄から気がついて真に依るべき道を求めて色々と苦しんで見ると、人生百般の事はとても自力では行かぬことになって、遂に仏陀に向って来る。かく仏に向ってどうかして安心を得たい、落着きを得たいと云う、真に道を求める心が胸底に切実になって来て、それからが正しく信仰問題である。

法然上人も親鸞聖人も全くこの点で苦しまれた。これは簡単なようで、実は大いにむつかしい。この問題の解決するところ、即ち信仰問題が解決して了つたところである。私の苦しんだ有様は『懺悔録』で諸君の十分に御承知のことであるが、私も初の間は、自分は善いことが出来ると思

って大いに得意になって居つた。ところが後に及んで苦しみに陥り、自分の立場を失って以後半年以上の生活は、どうか安心を得たい、信仰にもとづきたいという、この求める心のために頻りに苦しんだのである。回向という文字はこの状態を能く顕わした文字であります。

回向とは読んで字の如く自分の心を回わして仏に向けるので、従って自分の作すところの善根も功徳も仏に向けるのである。換言すれば人生百般の考を回らして仏の方に帰向する。これを修行的から言えば百般の自行を仏陀に捧げるとか、他のためにするとかして、寸毫も自己のためにせぬのが回向という文字の正当の意義である。誦経のあとに「願くばこの功徳を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」という回向を唱えるがそれである。さて回向とはこのような意味であるとは誰も皆知るところであるが、実際は、この回向は結局自力の回向で律法主義なはからいである。この回向を以て人に対し、事に対して行っていった最後に安心が得られるかどうかというと、それは断乎として駄目である。『人生と信仰』にも種々の方面からこの点を繰り返して論じたが、これを一言で言えば、相対的なもの、即ち家庭問題とか労働問題とか、その他何れの点からでも同様であるが、人生すべての問題から信仰の問題に向うにあたって、或は理想的社会を作って見たいとか、道徳をしっかり修めて聖賢の位置に立とうとか、兎に角人が完全に道徳を行いたい、是非この事はかくなさねばならぬ、万人に対して偏することなく十分に正しく尽くさねばならぬ、という精神は広大なる回向心であるが、何事も自己の回向心から出て来るときは、終に自らの立場を失うて倒れねばならぬ。これは非常に肝要なる点である。

現今の青年にしていやしくも道徳に向い、宗教に向う者は皆自身を捨てて他の人に向うか、自己を抛って仏陀に向うか、何れにしても所謂回向心を以て励んで居るのであるが、それがなお自分に出来ると安んじて居る間は何事もないが、一旦自分はとても完全になし遂げることは出来ぬと気づいて見ると、ここに大なる苦に陥らねばならぬ。

こうなると自分は到底出来ぬから止めるということも出来ず、止めずにやってのけようとしても猶出来ず、進退きわまって遂に立場を失うにいたる。ところが、世間にはやもすれば、他力とは自分の力は駄目であると投げやりにして居るのを他力まかせの生活であるなどと云うて居る者もあるが、それは大なる誤りで、そんなことが他力というべきものでない。それ等は例えると道を行く人が足が進めなくなって途中に坐り込んだようなものであって他力でどんどん進んで行くものとは甚だしい相違である。坐りこん

でしまった人は、他力即仏力、仏陀の偉大なる力の見えぬものである。

私自身の経験から云うと、ああせねばならぬ、こうせねばならぬと色々考えたけれど結局何事も出来ぬ。さればとて中止することも出来ぬ。そこに唯一つ現われ来った道がある。それは何であるか、ここは口で云いあらわしきれぬ点であるが、強いて云えば、自分には到底行えぬから、苦しんで居る者を見捨てたまわぬ恵みが向うから現われたのである。しかしもう一つ云わねばならぬことは、此場合でも仏の恵みをほしい〳〵と云うている間は、それもなお一つの回向である。回顧すれば、私はこの人生に何一つ頼みとすべきものが無くなり来った時、自分に対して真実の恵みを与えて下さるもの、自分の心を全く知りぬいて、しかも振り捨てざる真実の友人がほしい〳〵と思って居った。ここまで行き詰ってしまうと、そこがどうしても通りきれぬ関門である。多くの求道者が皆ここで苦しんでいる。これを極端に云うと、信仰に入るには、真剣に仏を尋ねて信仰を求める者ほど、却って信仰には入りにくいと云うてよかろう。

現今の求道者の中に、凡そ教育に関係して、自分の倫理実行のために、又は自己の人格を高めるために信仰に入らんと求める人は、ある程度までは善いが、どうしても絶対の信仰に入り難い。それは道徳のために仏に接せん、自己のために信仰を得んとつとめる心が強くなる程、自力の回向心が退かぬから、却って意外千萬に信仰に入り難いのである。私なども多少教育を受けて居たもの故、何分にも自分は他の者とは同じかるべきでない。如何にしても自分は理想的にやりたいと思うて居った、この自力回向をはこぶ心が去り難かった。

然らば最後にどうして安心を来たしたかいうに、この点はどうも口には云えぬ、強いて仮りに云うならば、自然に向うから恵みが向いて来たのである、意外千萬である。前に向って小さい光りを求めて苦しんで居ったに、後の方から大なる光りが覆うて来た。前の方に一掬の水を探して居ったに、後の方から洪水をかぶせられた心地であります。

自分は仏の恵みに包まれたのである、仏の恵みが先方から来たのである。それであるから、信仰を求めるとか、道を求めるとか云うにかかわらず、此信仰は、求めて得たのでなく、先の方より来って下された。このように一点の光、一杯の水を求めて居ったのに意外にも先方から堂々と救いの光、恵みの水が現われて来て下さった。これまで自分に対して同情者を求め〳〵つつあったのに、豈はからんや何とも云えぬ偉大なものが自分の心に入り満ちて下さった、まことに心の中にアアありがたいと喜ぶ外はない。

我々は常に悪心をひるがえして仏に向わんと勤め苦しんで居ったものが、一大転換をして全く仏の方より我々の方に偉大なるものが向いて来て下さった。そこで回向の文字の意義も全く方向転換を為してあらわれ、仏陀より我等を回向して下さるという意味になって来た。この意味の回向が味わわれるところが信仰問題の結局である。聖人が「謹で浄土真宗を案ずるに二種の回向あり」と云われた回向は全くこの意味である。このように云うのも、強ちに『教行信証』の文字を解釈するために云うたのではない。私の信仰問題を云うについては、此点を云わねば仏の御恵みのあり難い味は云えぬのである。この点は実に仏教の真髄である、ここに至って仏教全体の方向転換を来しまする次第であります。

私は今度飛騨から来て、数日新聞を見なかったが、松本に出てある新聞を見ると、信州の代議士石塚重平氏の死について掲げてあった。氏は一代の間頻りに仏教を喜んで居ったが死の三日前に、全くキリスト正教の洗礼を受けて死に就いたそうである。これは些細の事であるが、大いに注意すべきことであると思う。これを漫然と考えると仏教では真の安心が出来ぬから正教に転じたと見られるが、私の信仰から推察するとそうでない。石塚氏の奉じた仏教は心外無仏の碧巌録とかいう風の禅的のものであって、自分は飽くまで我即仏の立場であったらしい。平日はそれで修養し来って相当に得るところがあったに相違ないが、人生の最後は我即仏では安んずることが出来ぬから、そこで妻女達の奉じていた他力的の信仰の形に化せられたのであったらしい。もし妻女達が仏教の絶対他力の信仰に入って居たならその信仰に入れたであろうが、平素キリスト正教の話の外は禅的の話のみであったから、最後の立場を失うた時に方向転換を来して他力の信仰の形を取ったのであろう。これは宗派如何の問題ではない。とにかく昨今の新しい出来事であるから引例に出したのである。要するに絶対の仏陀を見出すが信仰の極致である。たとい自己以外に仏陀を認めて居ても、其仏に向ってなお自分から回向心を運んで居る間は、絶対の信仰ではない。聖人の他力回向と云わるるのは、全く言葉の上のことでなく、研究の事でもなく、はた法門上のことでもない、全く精神上に明かに他力の回向を受けて、仏の恵みを味うて喜ばれたのであります。

私は初めて仏の恵みに浴した時、これを云い現わすに「仏陀は慈悲の塊りである」と申し「この友達を得たのである」と云ったのは、皆この恵みに気づかして頂いたという意味であります。「得たのである」というはこちらから求めて得たのでない、久しい以前から大いなる恵みがわが身に臨んで居て下さったのに気づかなんだのである。これ

は実験であるからこれ以上には云い得るものではない。十年前にはこの味が即ち回向であるとは気づかなんだ。今では回向というは全くこの意味であると知っていよいよ深く喜んで居ります。このように祖師のお言葉通りに自分の経験で味わっております。これ一つ見ても聖人の宗旨は明らである。回向文を見ても他力の回向というようなことは当り前から云えば調子はずれである。その調子はずれで来てあるのは全く調子はずれの偉大な経験から出たことである。もっともこのことは法然上人にすでに現われてあるが、聖人に来って殊に著しい。

聖人の上を見ると信仰のおこる一念のみならず、それから以後の人生百般のこと何から何までもすべて仏の恵みから成り立っている。私も十年前回向を賜わって、それきりでなしに、信仰何事も皆他力の回向であるとありがたく喜んで居ります。こちらからは計らいばかりである、皆向うからどん〳〵与えて下さる、このようにして最後に仏果に至るまでこの回向の泉の絶え間がない。それで聖人は「謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり、一つには往相、二つには還相なり」と、ほとんど人生のすべてを尽して回向の中に入れてしまって、何もかも皆仏の恵を蒙らぬものはないといわれたのである。

それで、その回向の味をさかのぼって行くと、諸君は絶対の仏陀をありありと眼中に見ることであろう。今日の人は、そも〳〵絶対は実在なりや否や、或は絶対には人格ありや否やというて研究しているが、宗教としてはそんな問題は一つも必要はない。絶対の信仰は先方から恵まれるもので、すでにそれ自身が明白な事実である。私は多年の間慈悲という言葉でこの絶対者を言い表わして居った。四年前に『歎異鈔』の精神を話した時も、始終仏は慈悲の塊りであると説いた。今日から云うと其慈悲が向うから出て来るから回向と云うたのであった。

私は年々聖人の書を味わわせて頂いて来ました。昨年以来耳慣れた本願と仰せられた言葉の上に非常の味を知らせて頂いた。実にこの本願と仰せられたのは偶然のことではない。私共は朝夕に父母に如来の本願の辱きことを教えられ、又説教の上でも常に如来の本願、他力の本願ということを聞かされているから、耳に慣れきってある古い言葉であった。然し今日では私の耳に最も新しい語として力強く感ずるのは、またこの本願という言葉である。これ以外に新しい言葉を持って来ても私には喜ぶことが出来ない。こう気づいてから聖人の御著述を拝見しますと、本願という言葉が基本となってある。単に慈悲というと、ただ何となう親切の感じが伝わって来るだけで、文字が抽象的だけに物足らぬ感じがする。慈悲の喩には常に親のことを云う

が、親が子を日夜に憐む、その親心は何かともう一つ押すと、至愛至極の本願であると云わねば慈悲の極致を云い尽すことが出来ぬ。本願という言葉のみがよく絶対の仏陀が昼夜たえざる念力を以て我々に対して下さることを表わしている。名号というも、光明というも、その本源は仏陀が我々に対する本願で、実に確乎動かざる偉大なる力である。

この力を認めずに、徒らに途中に坐り込んでしまうのは他力どころではない、それは無力である。他力とは今までのような自力の回向では到底やりきれぬことになって、顧れば他力、即ち仏願力の非常の恵みをもって我の上に蒙らされる親の念力のあらわれである。親のまことの我に対する心であると云わねば尽くされぬ、そこで聖人は「他力というは如来の本願力なり」というて居られる。

誠に歎異鈔を取って見るに、もし本願の文字を除けば此鈔は読むことが出来ぬ。第一章に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」と云い「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」と云い「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」と云い「本願を信ぜんには他の善も要にあらず」とあり「弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」と云う。第二章以下にも本願の文字のない所はあるが、この本願という文字は如何にも力強く云うべからざる勢をもって貫いている。現今の多くの人は如来の本願と聞いて果して親の念力の如何にも偉大な大慈悲の力として本願という文字を解しているであろうか。もし偉大なる力が向うから我等に向って下さるという意味に取らずに唯漫然と聞き去り云い去ったならば頗る残念である。極りない偉大な御力が私の方に現われ来って他力の至極を十分に遺憾なく云い表わしたが此本願という字である。

聖人は一代に何を実験し何を説き何を為せしかというにただこの偉大なる仏陀の念力、願力を実験し、過去の生活から未来の行動に至るまで皆悉く仏陀の偉大な神力から来らざるものなしという信仰を以て、且つ行い且つ説かせられたのである。聖人の意から云えば釈迦一代の経説広しといえども最初の華厳経より最後の涅槃経に至るまでの間に或は真実、或は真諦、実諦と説かれたのは結局唯この仏陀の偉大なる真実至誠を説くの外なしというのである、これを具体的に云う時は即ち如来の本願である。この本願を正面から堂々と説いたのが大無量寿経である、そこで如来の偉大なる本願を正面から説いた経であるから此経の宗教は真実の宗教である。『教行信証』の教の巻に

「夫れ真実の教を顕わさば即ち大無量寿経是なり」

と標挙されたのは全くこの意味であります。然しそれかと云って他の経典が悪いというのではないが、一代経の中でどれだけ絶対の境界を高尚に説いても、その絶対がこの

相対の人世の上に及ばねば一向何の所詮もない。絶対界、即ち如来の広大な境をこの人生の上に渡すところで初めて宗教となるのである。

而してその渡す力は即ち本願であり、回向である、もしも絶対を高尚に説いても夫は唯仏の境である、宗教とは申されぬ。又もしこの社会人生を都合よくやるためならば道徳で事足るべし、宗教の必要はない。唯この絶対真実の力が人生に及ぶというそこが宗教である。この絶対の霊境に到達するに相対人生の方面より絶対界に向って歩みを進めて到り得るのでなく、絶対の意志、即ち仏の本願からこの人生の方に向って手を下して引入れてくださるのである。偉大なる如来の本願を説かされる大経を説かれる時釈尊は真に満足なる形をあらわされた。聖人は和讃に

如来の光瑞希有にして阿難はなはだこころよく
如是之義ととえりしに出世の本意あらわせり

と讃述せられた。まことにこの大経は仏陀大慈悲の発現したるところ、真にこれ仏教の真面目一代経の真髄であると聖人が随喜せられたのである。

私は三年前にこの（飯山）修養会でこの教行信証を話させて頂いた時には、釈尊の伝記からさかのぼって大経は真実の教で、即ち浄土真宗これであるということを話しましたが、それではどうも十分でない、自分が回顧して信仰に入った道筋を跡づけて見ると、如何にも釈尊の成道なされた実験と共鳴するように思われる点からその様に述べたまでであって、この如く信仰の実験として釈尊を仰ぐもよいが、実験の最終に光の現われたのは釈尊の如く自ら光明を放って絶対の境界に入ったのではない。全く無明暗黒の私に向って慈悲の塊りの仏陀より恵みを下し賜ったのである全く如来回向の信心である。

親鸞聖人は殆んど釈尊を無視されたかのように、真宗の寺院においては釈尊の像を安置することをしないのは、一面いかにも怪しからぬようであるが、其実聖人は弥陀釈迦二尊を別視することなく、仏陀と云えば阿弥陀一仏であって、この仏が人生に現れて下さったのが釈尊であるという思想である。それ故弥陀一仏と云うからとて他の多くの仏菩薩を排除したのではない、絶対の唯一で、ただに釈尊のみでなく、聖徳太子も法然上人も、皆ひとしく仏陀広大の恵みの顕われであると見られたのである。然れば此人生に応現された仏陀だけでなく種々の化身までが皆一仏願力の顕現であり、種々に善功方便して我身を絶対の霊境に引入れ給うに外ならぬことと信ぜしめられるのである。嘸奇なるかな不可思議なるかな、此人生はこのような偉大な仏力が縦横無尽に働くところの舞台であって、結局一仏名号、即ち南無阿弥陀仏であると云うべきである。これを正面から書き表わしたのが大経である。聖人が教の巻で

是を以て如来の本願を説くを経の宗致となす、即ち仏の名号を以て経の体とするなり

と云われた所である。

以上のように述べてきたのは殊更に教行信証の文脈を逐うて解釈したのではない、自分の信仰上からこの仏陀絶対の恵みを味わう時は、この如く云うより外はないのである。併しこう云ったからとて自分の信仰が変ったのではない、三年前に慈悲といったものこの偉大なる仏力を云うたのであるが、その慈悲を説くにあたって何となく本願という言葉では説きにくい感じがした、なぜならば本願というと直に五劫思惟とか、十劫正覚とかいうことが邪魔になったのであった。然しよく味わって見ると、この本願という文字は実にありがたい文字で、非常に力強い言葉である。この文字の上に於てこそ絶対の仏陀の威神力を見ることが出来る。さればこそ歎異鈔に

聖人の常の仰せには弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよと御述懐そうらいし云々

というてある。この絶対の本願力、仏陀の御恵みは他力信仰の云うべからざる味わいである。その如来の選択本願が即ち南無阿弥陀仏という名号である。これを次に話そうと思うのである。（聖人の信仰第三章）

× × × × ×

処刑を前に

可説居士

南無阿弥陀仏のお慈悲まるまると
いただきまつりて親のねがい知りぬ
本願の業に招かれいだかれて往く
南無阿弥陀仏のめしにかないて
み仏のお慈悲はつねにまどかなる
若不生者のおもい満ち足る

四月五日　（四月二十六日刑死）

人生随想

柳瀬留治

己れを知るということ

己れを知るということは、我々一人々々の生涯をかけて根底となるべき大きな仕事である。自覚というもそれである。己れを知ると他も知られる。よく人に対して不平不満をいう人がある。理想家とも見られるが己れの知られぬ為である。又不満を自身に向け自己批判のみをし、自虐をしている人、これは道義者に見えるがこれ又己れのわからぬによる。

誰も己が真直ぐだ正直だとし、己のいうことは正しい、見方が正しい、理が通っていると主張する。

動物には己という自我意識はないが、これに代る本能があって己の欲望をつらぬこうとしている。人間も本能的に己を肯定する。肉体そのものが本能的に出来ており、肉体を容器とする精神も本能的に自我を肯定し、主張し、他と闘い己れを守ることをする。その点動物とそう変らない。結局文化を持っという点丈だが、それ又功利を出ないもので動物より不正直で一層自我的ともいえる。

己れとはどんな代物か、これは持主の御本人は最もよく分っていそうなものであるが、当の本人になると仲々わからぬ。何にあれ何処までも主張し守って行くに精一ぱいになっている。この自我、我執のみで、己れ自体に対して盲目的である。孔子のいう知命（ちめい）ということ、仏教の悟りということは、この己れを知ることである。

東洋では道徳においても文芸においても、没我という様に己れが無我になって。天真の真が、美が、善があらわれるという。それは自我の邪念から解放されることにより、はじゆて真にふれ得られ、美をなすからである。真の美も己れが素裸になれて初めて表われるものである。

己れが素裸になれるということは、自ら手放しになれることで、自我の囹圄から解放されること、自我、我執から離れることである。我執から脱れ得ると、己れの真の値打がわかる。他人に対し、社会に対し、不平不満を余りいわ

なくなる。己れがわかるということは人間というものの底がわかることである。

自我の固執より脱して初ゆて正体がわかるのであるが、さてそれを捨てよ、離れよといわれれば、より固執し放されない。己れより外に力にする者がない中は、これを命の綱と摑んで離さない。値打のないつまらぬ己れよりもっとはるかに偉大なもの、力になるものが与えられ、大きな価値に触れて初めて放せるのである。それは結局偉大なる宗教以外に道のないことである。

己れ以上の力強い偉大なものに遇うと、己れの小さい醜いものたることが底からわかり、我執のつまらなさがわかり、その大きな力の前に頭をさげる。これは私における念仏なのである。念仏において機の深信（じんしん）といって己れの無価値のわかることで、それは法の深信、即ち大なる仏力に引揚げられてはじめて自我を捨てられることで、ありのままなはからいのない生涯を過せることになる。

かく己れの代物がわかり、人間性の根底がわかると、生活上どんな不運に遭遇し、どう立場が崩れようと驚き悲しむこともなく、外界の如何に動揺せず生きて行ける。

非情の情

私の情というのは私情の意、非常とは私情を離れた真情の意である。世間に情の濃かな人を情が厚いと愛し親しまれるのであるが、主情的に自身の情のみを頼って事を決め行動する。すると情に執し平静に物が見られぬため、その折々の情によって味方になり敵にもなり、相手の全体を摑んで信じる事が出来難い。それで情に惑い、情に苦しむのである。かくいう私も半生それで悩んだことであった。

明治の文豪、夏目漱石もそした人情を超えて淡々とありたいと念じた様である。彼の『草枕』の書き出しにも「智に働けば角が立つ、情に棹（さお）させば流される。意地を通せば窮屈だ」といい、「又恋は美しかろ、孝も美しかろ」然し自身がその局に当れば利害の旋風に捲き込まれて目はくらんで仕舞う、従ってどこに詩があるか自身には解しかねる。「これがわかるためにはわかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。第三者の地位に立てばこそ芝居は見て面白い。小説も読んで面白い、小説を見て面白い人も自己の利害は棚へあげている。見たり読んだりする間だけ詩人である。苦しんだり怒ったり泣いたりは人の世のつきものだ、余も三十年の間それを仕通して飽き飽きした」とも云っているのである。

わが窪田空穂翁も、生活は事務的に事を処理して行くことだが、それだけでは物足らないので無駄な非事務的なことを楽しんで求める、といった意味のことをいわれてい

る。事務的とは仕事の意である。世事は作業的に私情をまじえずにやるとごたごたせずに行けるが、それだけでは冷灰木石の生き方で味気がなく、何か潤いが欲しくなる。しかし情が加わると、特に職場でも付合いでも、必ず加担したり反目したりして、和即ち協同をそこねる。男性間でもそうであるが、ことに主情的傾向をもつ女性には多いようで大抵の私語はそのようである。

推古時代にも公務上にそれがあったと見え、聖徳太子は十七条憲法で「私に背（そむ）き公に向うはこれ臣の道なり」と示していられる。元来、公という文字はハの下にムを書く。ムは私の傍で、手かぎで利をふところへかきこむ意の象形で、ハはそれを左右に払い退ける象形である。公務も職場も、又世渡りも同じで、私情をまじえると必ず公正を失い、過ちを起してごたごたが絶えない。それでは外の付合いは公でやり家庭では私情でとも思えるが人間には限度があって、家庭でも限度を越すとごたつくのである。それで私は、非情の情、ということを言いたいのである。

情は盲目だという、特に子を思う愛情はそのようである。先日私の園で、園児の社会成熟のテストを各母親に記入して貰った処、世にあるまじき高い指数の出るのが多く、子に対する私情から各々子を買いかぶっているのを見たのである。私情のため第三者となり正しい観察が出来なかったのであろう。真の情は非情の情である。それを本当に行えるのは人生の根底に達しないとむつかしいであろうが、私情や愛は盲目的で、かえって真の情が届かないものがある。

仏教では愛情とは云わず慈悲といい、愛は憎の反面とされるのである。『歎異抄』にも「いかに不便に思うとも私情ではたすけられぬ」といい、又「親鸞は父母孝養のために一返だに念仏申したことはない」といっていられるし、又「愚身の信心はかくの如し、この上は念仏をとりて信じられようか、またすてられようと面々の御自由になさい」と突き放してもいられる。突き放されてはじめて真の情がわかるものである。情を超えた情、それを非情と今いったのである。

眞実の籠る嘘

世に絵そらごとという語があり、芸術は偉大なる嘘だといわれる。有名な近松の言に、芸は虚実皮膜（きょじつひまく）のうちにあるともいわれている。心の真実を人に伝えるには自然事実を離れた嘘をあえて言わねばあらわせぬ場合が多い。即ち真実をあらわすための嘘である。よく嘘から出た誠というのもそうしたもののようである。

子供など危険な遊びに興味をもちスリルに興じてやり出すと、止めよといってもとても止めるものでなく、かえって拍車をかける事になる。そして時により面白そうな物を見せると、それに眼を移して、そちらに転換し危険な遊びから離れる。

釈尊も凡夫に道を説くのにその手を用いていられる。たしか法華経だったと思う。火宅無常の人生を説くための譬喩として、子供達が火事になった家の中で戯れに無中になっていて、危いから外に出よと呼んでも出ようとせぬ。そこで嘘をもって、戸外に早く出よ大白牛車をやろう、次の者に鹿車、次の者に羊車をと云うと、子供は我さきにと飛び出して焼死を免れた。そこで子供等に等しく大白牛車を与えた。大白牛車とは一仏乗のことで、こうした嘘のことを真実をあらわさんための方便の教といわれる。

嘘は、その底に心の真実が籠っていることによってのみ人の心を感動させ、その人を大きく深い境界に引きいれ向上せしめる。もしその底に真実がなく、偽りのための嘘であったり、私利私欲のためのものであっては、人を害ね我を偽り、非道義きわまるもので、悪むべきものである。

私も釈尊のような大指導者にあやかりたいが、人物が狭小で、目先きの事実だけしか見えず、そればかりにこだわって、大きな嘘が現われない。それで精々思い切って言えるのが毒舌位である。それも他人には仲々云えず、諧謔かくすぐりしか口に出せない。普通は御機嫌とりの下手なお世辞で終る。

誰しも最初が大切である。最初から正しい指導が大切である。触れた環境や経験が地色となって染みつくと、後から来たものを他所者の侵入のようにはねつける自我的傾向を持っている。そうなると児童心理と同様に正面から強く云っても、かえって我執をもち扉を開こうとしない。そこで己れの固守しているものを自ら忘れ捨て、飛び移らしめるのに、目もあやなる偉大なる嘘をもって諭し得たらばと思うのである。それは偉大なる指導者、偉大なる芸術家にしてなし得ることである。

信仰の両面と労働問題

佐藤強三郎

浄土真宗の信仰には両面の態度がある。

第一の面は、どこまでも頭を下げて平和にして行くことが出来る。即ち如来の本願力に照らされてはじめて自己の罪悪人なることを知らされ、真から頭がさがる。故にこの面からは、自己が無実の罪におとし入れられて殺さるるとも、自己が一生世に認められずして闇から闇へ葬り去らるることありとも、仏陀愛護の下、人に対し、世間に対し一言の不平を言わず、安心して埋め草の如く信順の姿をもって落命することが出来る。しかも安養浄土へ往生することを信じて。

第二の面は、自己の所信を主張して死しても決して屈せざることが出来る。即ち自己の救済せられたる無限の慈悲に感謝すると同時に、死ぬるまで虚仮不実の根性のやまざる蛇蝎のごとき者なるを承知して自己の主張には不惜身命（ふしゃくしんめい）の態度で一生を終ることも出来る。

これ浄土真宗の信者が信仰の上から堂々と勇気を鼓して進むべきは進み、死すべき時は死することの出来るゆえんである。

——○——

第一の面として徹底的に平和信順の姿で行くことも出来るし、第二の面として斃れてなおやまず、何処までも自己を主張することが出来る。

これは共に、五分五分の相対を離れたる無限大悲の絶対の仏光に照らさるるが故に、唯仏願を仰ぎ、仏力にひかれて、自己の罪悪煩悩の深きことを気にかけず、やれるだけやらせて貰うことが出来るからである。

——○——

労働問題の中心は何か。賃金報酬の公平なる分配と、人格の尊重を互に主張する問題である。事業主も労働者も共に自己の生存権と利益の公平なる分配を念願する。然して両者共に凡夫である。その重点は概して物質の要求である。しかも状勢は勝てば官軍、敗ければ賊軍という思想の

上に立って居ることが甚だ多い。

× × × ×

近世、労働問題がやかましく唱えられるまでは、資本家は財力と権力とにものを言わせてたしかに横暴勝手の振舞いが多かった、これはきびしく反省すべきである。

その資本家側に勝って労働者側の勝利に帰せんとするや大衆をたのみ数をたのんで行き過ぎの場合が決してすくなしとしない。これもまた大いに反省すべきである。

さかのぼって考えるに、昔の封建政治の時代に、自由民権を主張し、議会政治になればたちどころに平和が実現すべきが如く考えられた。しかし議会政治になってすでに八十余年になるが、日本の現状はどうであるか。たしかに昔よりは進歩改善の跡は認められるが、平和な理想は決して実現されていない。朝野は不平に満ちているではないか。

——○——

これは如何に機構や法律を立派に造っても、これを運用する人民各自が私利私欲をたくましくして正しきことを行わぬことに起因している。たとえば、立派な選挙法を作っても、選挙民が金で投票を売り、正しい投票を行わず、代議士は大言壮語して人民をあざむき、真実に国家民衆のための正しい政治を行わないためである。

かくして一体何時になったら立派な政治、不安なき社会が実現され得るであろうか。

これは民主国家、資本主義国家、共産主義国、其他何々主義国家を問わず、何れの世界においても同様にして、決して理想国家は実現しないであろう。何故か？人間が誠実でないから。世界の開闢以来約一万年、かくの如き次第であり、今後も亦この通りであろう。

しかるに我等人間の生命は五十年、八十年位にすぎないここに自己の命のある内に如何にして平和な生活を送ることが出来るかを考えねばならぬと思う。

それには先ず自己を反省して、自己の安住の世界を確立せしめなければならぬ。そのためには如何にしても精神的解決をはからなければならぬと思う。

——○——

労働問題においても、いかに機構や法規を立派にしても私利私欲の凡夫が相集って研究討議しても、自己の利欲をのみ考え、真に互に幸福ならんことを正直に誠実に実行しなかったならば、決して〳〵円満なる解決、平和は実現しないと思う。

若し労働者が真に互に共同の幸福を願うならば、優良会社に就職して失業の心配なく、高給を取っている者が、他の会社がつぶれて失業し生活に困難している仲間に大いに救済の手を延べてもよさそうなものと思う。

資本家も亦事業の盛大な時は豪勢を極め、一旦不振の気配ありと見るや財産を隠匿して後日の安全をはかり、しかも労働者の賃金をも払わざるの暴挙はたしかに民衆の憤りを買うものである。

——○——

労働問題に対処する態度としても、互に自己の凡夫たることを自覚して、真実をもって応答し——己れの欲せざるところをば人にも行わず——共に虚心坦懐（きょしんたんかい）の態度をもってのぞむべきは勿論であるが、腹をきめて時には何処までも頭を下げて譲るべく、時には断乎としてあくまで主張すべきを主張する覚悟あらば——何れの日か笑って語ることも出来ることと思う。誠実を尽くして相手を馬鹿にせず、自己に死すとも退かざる覚悟あらば、事理（じり）おのずから通ずるであろう。

——○——

誠に敗くるも勝つも、共に凡夫同志の世界、従うも戦うも、これ止むを得ざる時機、唯いずれにせよ、共に廻心して大悲の招喚を仰ぎ、死して共に楽土に往生することを得ば、また何をか言わんや。

× × × × × ×

死に様はよし如何あらむとも
凡夫われ唯御仏の誓にまかせて

○

雪の越後　祖師の遺風に涙して

——○——

——私は出生数日、幾度か危篤の状態をつづけたために祖母様が、父上に「丈夫に育つ様につよい意味の名前をつけて下さい」と注文せられた。そこで数日考えられた結果私の名前となった——

名号と何かわるらん我名こそ
親のたまいし慈悲の呼び声

○

名聞の罪を重ねて旅する吾に
摂取不捨とのたまうか仏は

○

ころぶぞと　また子を抱く　雪の路

○

春光に　豚も人も　嬉々として

念仏詩抄

浄土眞宗

浄土真宗
大悲の宗教
〃如来の作願をたずぬれば
苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまいて
大悲心をば成就せり〃

〃弥陀大悲の誓願を
深く信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく
ナムアミダブツを称うべし〃

〃如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし〃

木村無相

浄土真宗
大悲の宗教
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

この息が

わが生きの身の
この息が
如来の息と
聞きぬれば
如来とはなるる
ときぞなき

わが生きの身の
この息が
ナムアミダブツと
聞きぬれば
み名とはなるる
ときぞなき

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ご信心さま

ご信心さま
ご信心さま
天地いっぱいの
ご信心さま
わたしつつんで
ナムアミダブツ
わたしみたして
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

御恩のみ名を

親鸞聖人ご和讃に
〃信心のひとにおとらじと
疑心自力の行者も
如来大悲の恩を知り
称名念仏はげむべし〃

疑心自力の行者よと
呼びかけたもう祖師の恩
疑心自力のわれらにも
あらわれたもう御名の恩
ご恩のみ名をいただかん
いざいざみ名をいただかん
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

呼びたもう

弥陀の名号
となえつつ
聞こゆるものは
弥陀のみ名
憶念の心と
なりてこそ

愚かなわれを
呼びたもう
煩悩の中に
呼びたもう
ナムアミダブツと
呼びたもう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

西のかなたから

西のかなたから
ナムアミダブツ
わたしめざして
ナムアミダブツ
しみいりたまい
ナムアミダブツ
しとめたまいて
ナムアミダブツ
名のりたまいて
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わたしのため

弥陀の本願
わたしのため
弥陀の名号
わたしのため
西方浄土
わたしのため
〃本願名号正定業〃

弥陀の本願
信ずべし
弥陀の名号
称うべし
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

× × × × × ×

山頭火翁の句

この道をたどるほかない草しげくとも
とんぼよどこまでついてくる

信味その折り〳〵

花田正夫

呼子の笛

四月の朝日新聞の天声人語に次の記事があった。

「昨年十二月に同志社大学の山岳部の学生三十三人が、富山県の立山で遭難し、不幸にも七人が亡くなった。その中でたすかった人々は、猛吹雪のために視界は零となり、人の声も嵐に消された時、唯一つ、甲高い呼子の笛の音がたよりとなって、その方向に進んで山小屋に辿りついた。光を失った時、人々は孤独になるが、闇にあっては音が一番のたよりであり、たのみになる云々」

とあった。これを一読して、闇の吹雪に彷徨する者こそ煩悩に覆われて、無明の大夜に流転する自分である。この行方も知れずはてしなく迷う身に、呼子の笛の音のように仏の呼び声、南無阿弥陀仏とさえわたるみ声だけが唯一のたのみであり、よるべである。この声、南無阿弥陀仏に導かれて浄土への道がおのずからひらける。法蔵菩薩の

重ねて誓うらくは、名声十方に聞えん！

との深い大悲のほとばしりを仰ぐばかりである。

親鸞聖人は、南無の言は帰命なり、帰命は本願招喚（まねくよぼう）の勅命（おおせ）なり、と信証せられている

よく流布されている歌に

よび声が力なりけり旅の空、風吹かば吹け雪降らば降れ

とあり、七里恒順和上は

火と水のその中道を行くや人、来たれとさそう声をしるべに

と書いて人々にも頒かたれている。

それだのに、我々は、呼び声を聞くことよりも、自分が見ようとすることにかかりはてて、その執心に縛られて聞けども聞こえずという始末で迷い続けている。然し、自分には何一つ正しく見る力はなく、身勝手な心にさまたげられて、ひとりよがりの洞窟に閉じこんでうごめき廻っていて、自分の考え通りにならぬと人を恨み世をのろい、怒りや愚痴ののたうちとなる。仏はこうした我々の盲人の苦悩

をかねてしろしめして、悲心切々として南無阿弥陀仏とよび続けて下さるのである。

私の高等学校の数年先輩に非常な秀才がいた。岡山の高梁中学で「君は文科でも理科でもやって行ける」と太鼓判をおされたが理科に入学して校友誌に一文を草した時、京大の西田幾太郎博士の目にとまり、是非京大の哲学科へ来るようにと呼ばれ、京大に進みました。ところが二回生の頃に頸推カリエスとなって、治療に専念したけれども、当時難病とされたもので、病勢は悪化し遂に恢復の望みを失った。その時、彼の友人で京大哲学科にいた者が見舞いに行くと、彼の病室に一杯積み重ねてあった書籍がスッカリ無いので、

「君書物は！」

ときくと

「僕は今迄、病気を押して哲学書を読みあさったのも、それで成功しょうとか、生活の資にしょうなどとは思ったことはない、御覧の通りの病状だから……。ただね、人生に光りが欲しかったんだ。哲人の言葉の中にそれを見出したかったんだ……。今わからなくても読めばいつかわかろう、と思っていた間はまだ希望があった時間も惜しかった。しかし今では読んでもわからんと

いうことがわかってきた！もう本も無用になったので売ってしまったよ……」

とのこと。そこで友人は色々と慰めにかかったけれど

「君の心は嬉しいがね。君自身が、光りを見出しているのかね！」

と云われて、答えることも出来ず、

「どうか、何でもいいから生きていておくれよ」

と頼んで別れたが、ほどなく自殺してしまった、惜しいことをした……。と歎息をもらすばかりであった。

私も京大の哲学科にいた時とて、ああ本当に惜しいことをしたね。同じ岡山県出身の法然上人は、十五の時叡山に登り、四十三歳まで一切経を五回読破し、あらゆる修行を重ねられたけれど、わが機すべておよび難く、わが智最も愚なりと人間の持つ力の限界に立って「闇に道に迷い、渡しに船を失う如し」の大絶望にあって、はじめて善導大師の書によって、念仏成仏の光明を得られたのである。哲学に絶望した友の上に、この念仏の燈炬があることを知ってくれていたらなあ！と友に語ったことであった。

二河白道の一地点、進みもならず、退くことも出来ず、また止まることも出来ないというところまでおいつめられたまんま生命を終えるとは、何という惨事であろうか。蓮如上人が「いかに宿善順熟すといえども善知識のわれ

らなくばいたずらごとなり」と云われているが、上人も亦こうしたいたましい経験をいろいろ持たれたことであろう。

無明の鬼

一茶の三十九歳の春、郷里柏原に帰った時、父は病に臥し、一ケ月ほど看病して遂に亡くなった。その時のことを「父の終焉日記」に刻明に誌しているが、一茶と継母の仲はむつかしく、事毎にきびしい争いが続いている。死を前にした父、そして異母弟の仙六などの間に立って一茶の苦悶は涙と血のにじむように出ている。ことに遺産の分配についての争いはその後十三年も続いた。

さてその日記の余白に、次のことが書かれている。

——○——

兄弟、親のもとよりおのおの五百両の金を得て帰る道にて、弟、彼の金を棄てけるを、兄、何とてすてけるぞと問いければ、弟泣く泣く語りける。

我この金を持ちたる故に悪心起り、その五百両を奪いとりて千両になさばやと思う悪念起りぬ。されば、金のうたてきものなれば、棄ってるなりとなんいいける。

兄、涙を流して、我も汝を殺してその金を奪い、千両となさばやと思いしとて、同じく渕に棄てにける。世にこれを断金の交りというなり。

——○——

兄弟二人、親の病気見舞に来りけるに、一人は道近ければ早く立ちけれども、暮れたれば前後も見えず、道に塚穴ありければ、屈み居て明くるを待ちける。

然るに、一人は道遠くしてあとから来りけるより、その穴に落ちけるに、先に入りたる子は、鬼来りて我を喰わんとすらんと防ぎ、あとから来れる子は、穴に鬼ありて我をあやめんかと、互に摑みあいけるに、夜明けて見れば兄弟なり。生死の間に迷いおれば、皆無明の鬼なるべし。

一茶は、断金の交りを願いながら、生死罪濁の凡夫の悲しさ、煩悩に覆われた無明の身、異母弟とはいえ兄弟同志で、疑心暗鬼の血みどろの争いを続けていることをどんなにか苦しんだことであろうか。

私自身この一茶の「無明の鬼なるべし」の一句に光りなき身を照らし出されて愧じ入るばかりである。

一茶はその後、

月花に　四十九年の　無駄あるき

と詠じて江戸の生活をすて、故郷に帰り、継母と異母弟と和解して、父の家を二分して壁一つ隔てて住み、五十二歳になって妻帯して一家の主となった。

これがこのついのすみ家か雪五尺

明月の御覧通りの屑家かな

等々と詠じつつ、色々の苦難を経て、やがて五十七歳になって、他力信心について、

「…別に小むずかしき子細は存ぜず候。ただ自力他力何のかのいう芥（あくた）もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、その身を如来の御前に投げ出して、地獄なりとも、極楽なりとも、あなたさまの御はからい次第あそばされくださりませと、御たのみ申すばかりなり云々」と述べ

ともかくもあなた任せのとしのくれ

文政二年十二月二十九日

と、信心の智恵がひらけている。まことに、鬼の念仏ということを世間でよくきくが、その鬼こそ我が身のことである。

宗教と譬喩

或人から「宗教では大切なことになると譬喩で話されるのでわかりにくい」と云われたことがある。

これは仏教ばかりでなく、キリスト教にも沢山出て来る、蕩兒かえる、の譬はキリスト者にとって大切なものであり、仏教の法華経には七大譬喩があげられる。中でも長者窮児の譬喩と火宅三車の譬喩は誰しもよく知るものである。又浄土教の人々には善導大師の二河白道の譬喩は信心の中心問題で、近角先生は、譬喩以上の譬喩である、といわれている、信仰生活そのものであると感得されたのであろう。キリスト者には、新教徒であったために英国の獄舎に十二年閉じこめられたバンヤン著の「天路歴程」も聖書につぐ書として珍重されている。

以上は譬喩の例をあげたのであるが、宗教は絶対なるものと相対なるものの交渉、交流がある、そこに相対界にのみすむ我々にその絶対なるものをとどけるには、論理や実験ではどうしてもあらわせないものがある。西田幾太郎博士は「絶対矛盾の自己同一」というような新語をもってそした世界を表現された。又禅家は「鳴かぬ烏の声」とか「隻手の音声」とか、「底のない槽に水を一杯汲んで持って来い」とか、沢山の考案があって、相対分別の智恵をどんなにしぼっても答えの出ようのない問題を提唱する。これによって「百尺竿頭一歩をすすめる」絶対の境界に導き入れようとされる。

そこには、もう世上一般の言葉では通用しなくなる。米国で鈴木大拙師が禅を説かれたが、今では、さとり、とか禅という言葉はそのまま英語になって訳のないままに通用していると聞いた、二元対立した相対思想のみの欧米では禅に示されるさとり、絶対と相対が円融無碍な境界はあらわすに言葉が無いのであろう。

浄土教には、誓願の不思議、名号の不思議、仏智不思議、不可称、不可説、不可思議、といい、或は、義無きを義とすとも、自然法爾の仏の御はからいともいわれる。

以上の世界を指差すには、譬喩をかりる他にあらわしようがないのである。そしてその譬喩は真実、真如の月を指差すので、その真如の月を仰いだ時はじめて譬喩がもつありがたさもわかるのである。

常於大衆中　説法師子吼

近角先生が宗教法案問題で東奔西走されていた時、四国からMさんが走せつけて、御手伝いをしていた時、法案が衆議院を通過して貴族院に廻ったということを貴族院議員の方から聞かれたMさんは、早速会館の先生のもとに飛んで帰ってその由を申し上げた。

すると近角先生は、「M君それだけか？」と質問されるので、Mさんは「それ以外は何も……」とお答えすると、先生が真赤な顔をせられて「君は貴族院の人に聞いたのだろう、その時何故これは悪法だから反対して下さるようにおたのみしなかったか？」ときびしく云われた。

Mさんはそこで「私如き名もない田舎者が、貴族院議員さんなどに何を申上げられましょう、申上げても何もならぬと思いましたので……」とお答えすると、先生は強く「君はそんな心で手伝ってくれていたのか。本当のことならどんなに偉い人であろうと臆することはいらぬではないか、偉い人の前では云えぬというような心底だったのか」と、叱責せられた由である。

又、先生の郷里の西源寺で、善男善女の集った法要で、宗教法案の不合理なことを淳々と、汗を流してお説きになった。そして座敷に帰られた時、大阪のOさんが御挨拶に行かれると「O君、僕が今話したこころがわかるか？」と質ねられた。Oさんは、何をおききになっているのか見当がつかぬまま生返事をしていると、「商人の君には、こんな田舎の老翁老婆の多い席で汗を流して法案反対の趣旨を説くよりも、もっと中央部の有力者や知識階級の人に話すのが有効であるのにと思うであろうが、真実なことは、有識者であろうが、田舎の老翁であろうが、みんながうなづくことの出来るはずだ。今日集った人々が皆うなづいてくれるのを見て、僕は非常な力づけを得た……と」、汗を拭きながら語られたとお聞きしている。

法蔵菩薩が四十八願をえらびとって、更に重ねてのお誓いを述べられた偈文に「常に大衆の中に於て説法師子吼せん」と、世自在王仏の御前で宣誓せられているお心の一端が近角先生の言動のなかにうかがうことが出来る。

道ありと信じ得道の人を信ぜず
これ信不具足なり。

仏道に疑いはないが、その道と人とが一つにとろけた人を信じ得ないでは、まだ信心が不足である、聞き足らぬところがあるという涅槃経の一句である。

得道の人を信ずるには、その人にめぐり遭い、そこに人即道の消息にふれてはじめて信ずることも出来る。しかし遭うて会わず、というように、我々にそれをそれと知る眼がないと、行き違いになってしまう。然し幸なことには、得道の人の言動は、それに接する我々がどんな心でいようとも、それにかかわりなしに、一度聞き、一度接すると、消すことの出来ぬ力をもって我々の心にしみこんで来て、やがて同心せしめられるものである。それはもとより今聞いて今すぐというようなことではないが、地に蒔かれた種子のように、機縁が熟すると芽を出し、花を咲かせ、やがて実を結ばずにはおかない。

我々がつとめて得道者になることは出来ぬが、得道者の徳光が我々の中にしみこんで不和不識（しらずしらず）に同化され、向うが我々になりきって、やがて同一信心を恵まれる。聖人は、

曠劫多生のあいだにも、出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし

と、恩師上人への讃仰は、師によって見出された大きな喜びである。

美

高村　光太郎

美とは決して奇麗な、飾られたものに在るのではない。事物ありのままの中に美は存するのである。美は向うにあるのでなく、こちらにあるのである。芋虫は身ぶるいの出る程いやだという人達が、蚕はおこさまと言ってわが子のように愛しいつくしむ。それを荘子のように「利のあるところに愛あり」と解するのは誤りであって、事物に深く親み、事物を深く観し察するところから自然とその美を感ずるに至る好例なのである。戦場にある軍人が多く歌俳句を好むようになるのは一切を洗い流した魂がおのずから深い美を万物に求めるからであろう。

—○—

アウリッチ前イタリー大使は日本美術の理解者であるが「忿怒形の仏像だけはどうしてもよく分らぬ」と告白している。忿怒形の仏像が分らなくて他の仏像が本当にわかるということは我々には不思議に思える。

—○—

美は到る所にある。美はまた到る所に創り得る。美は山にも、海にも路傍の草むらにもある。

美は最悪の生活条件の下にでもあり得る。美は無類の高価でもあり得るし、又無二の廉価でもあり得る。

あとがき

和歌山県日高郡の道成寺で四月末に鐘供養が行われました。その寺の伝説に、奥州の僧安珍が清姫に慕われ、この寺の鐘の中に安珍が身をかくすと、蛇体に変身した清姫が炎を吹きかけて焼け死んだといわれます。

「道成寺うろこが肌のぬぎじまい」

の句も人の心を打つものがあります。池山先生は、自分のうろこが生えた心に気づかないと敷異抄が読めない、と内に虚仮をいだく身にさしのべられた大悲の御手を語られました。

人の性は善なりと教育者の立場から孟子は語り、墨子は人の性は悪なりと、政治家の立場から論じておりますが、仏の大悲のまことの手によって転化させて下さって、善悪の差別煩悩の毒を滅して、泥田に蓮の花が咲き、氷がとけて功徳の水と転じる妙、知る人ぞ知るありがたさであります。

近角先生の「親鸞聖人の信仰」の文は、教行信証を信味されたままを述べられたもので、本回は「廻向」の消息を教巻から御自身の御体験をもとに詳しくお知らせ頂きました。道と人とが一つにとろけた人、即ち得道の人におあいし導かれますことは凡愚の私共にはかえがたい、そしてまた無くてはならぬことを知らされますことです。

柳瀬様は青年期から近角先生に親炙されすでに八旬を迎えられました。幼児教育に専念せられつつ、生活の中から自然に湧き出る法味を人生随想に発表して居られます。又短歌草原誌を永年発行して「讃仏乗の縁」が結ばれております。

佐藤梓はすでに亡くなられた方でありますが、慶応大学に入られた頃、どもりで非常に苦しまれた挙句、幸に近角先生にめぐり会われて念仏の人として生涯を生き抜かれました。「うそから出たまことということがあるが、始めどもりをなおそうと思って宗教を求め、やがてそれが大間違いであったと近角先生から教えられ、どもりがどもりのまんま超えさせて頂く道を念仏の中から自然に恵まれた」と話されたのも私の耳底に深く刻まれております。

太子園に入られながら木村さんは仲々忙しい生活で、疲れをいやすことと、宿痾を養うことをおこたり勝ちでこまりますとのことでした。

御願い

六月号から誌代を一年一、〇〇〇円（送共）にさせて頂きます。
よろしく御諒承願います

慈光社

＜御案内＞

○一道会例会。毎月第一、二、三日曜、午后一時半。南区駈上町二の八八一道庵

※市バス、新郊通一丁目下車、東入る三筋目、左入る二軒目。

※地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。

※名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

○教西寺法話会。毎月十四日、午前午后。昭和区小桜町二丁目四

※市バス、名駅前より ⑤⓪妙見町行き、曙二丁目下車。

⑦①妙見町行き、御器所通り下車。

※栄町バスターミナルより、杁中行き、北山下車。

※今池より、御器所通り下車。

慈光 第二十六巻 第五号 昭和四十九年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

定価 半年 五〇〇円（送共）
一年 一〇〇〇円（送共）

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷人 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 吉野穂志郎

発行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四五七